

---

# ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言の 複合語アクセント規則\*

三村 竜之\*

## 要 旨

ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言では、語は必ず主強勢を伴う音節を一つ有し、その音節には高平調 (アクセント 1, Acc1) と下降調 (Acc2) のいずれかが現れる。本論文では、複合語における強勢の型 (主強勢と副次強勢の位置) と音調の別が規則により予測可能であることを主張する。

複合語アクセント規則の概要は以下の通り：(1) 複合語全体の主強勢は前部要素本来の主強勢が担い、副次強勢は後部要素本来の主強勢が担う。(2) 複合語の音調は、前部要素が多音節語の場合は前部要素の音調が複合語の音調となるが、(3) 前部要素が一音節語の場合は、後部要素の音節数と結合要素の有無ならびに種類によって決定される。後部要素が一音節語であれば全体の音調は Acc2 に、後部要素が多音節語であればその音調が複合語全体の音調となる。ただし、結合要素が介する場合は各要素の音節数は関与せず、結合要素が *-er* あるいは *-s* であれば全体の音調は Acc1 に、*-e* であれば Acc2 となる。

上記の規則には例外が存在するが、各要素の音節構造、品詞、語種の面から説明がほぼ可能である。

## 内 容

1. 序
  - 1.1 本研究の目的
  - 1.2 本研究の意義
  - 1.3 先行研究
  - 1.4 資料、インフォーマント、調査方法
  - 1.5 表記
  - 1.6 Sandnes 方言の概要
2. 複合語アクセント規則
  - 2.1 強勢の型
  - 2.2 音調：Acc1 と Acc2 の選択
    - 2.2.1 前部要素が多音節語の場合
    - 2.2.2 前部要素が単音節語の場合
      - 2.2.2.1 後部要素が多音節語の場合

- 2.2.2.2 後部要素が一音節語の場合
- 2.2.3 結合要素を介する場合
- 3. 複合語アクセント規則の例外
  - 3.1 後部要素に拘らず複合語全体が常に Acc1 となる場合
    - 3.1.1 前部要素が機能語である複合動詞
    - 3.1.2 前部要素が動詞不定形の場合
    - 3.1.3 前部要素が-VCC(C)の音節構造を有する場合
    - 3.1.4 前部要素が頭文字語の場合
  - 3.2 後部要素が Acc1 の多音節語でありながら複合語全体が Acc2 になる場合
- 4. 結語
  - 4.1 まとめ
  - 4.2 今後の課題

## 1. 序

### 1.1 本研究の目的

本稿の目的は、筆者がフィールドワークにより採取した一次資料に基づき、ノルウェー語 Sandnes 方言（以下、Sandnes 方言とする）における複合語のアクセント規則を、純粹に記述言語学的な見地から導くことにある。

Sandnes 方言は、語に主強勢を伴う音節が必ず一つあり、その音節には高平調と下降調の二種類の音調（ピッチアクセント）が現れる。慣例に倣い、本研究では前者を Acc1、後者を Acc2 と呼ぶことにする。複合語全体の強勢の型（主強勢と副次強勢の位置）と音調の別が、原則的には規則により予測可能であることを主張する。また、例外的な事例に関しても、複合語の構成要素の音節構造や語種、品詞といった情報から下位規則を設定することで、ほぼ全てが説明可能であることを併せて主張する。

なお、本研究で扱う複合語は、二要素から成り、前部要素が「修飾部」、後部要素が「主要部」という意味構造を有するものに限定する。

### 1.2 本研究の意義

ノルウェー語は方言研究の歴史は長いものの、本研究の対象である Sandnes 方言に関しては、管見に及ぶ範囲ではまとまった研究報告はなされておらず、近隣の音声的に類似する Stavanger 方言の記述（例：Selmer 1927; Vanvik 1956 [1983], 1979）からその姿をうかがい知ることが出来る程度である。特に、外国人研究者が利用可能な資料は皆無に等しいと言っても過言ではない。したがって本研究は、まず第一に、記述の乏しい方言の音声資料を日本人研究者が利用できる形で提供するという点で、非常に意義のあるものと言える。

第二に、本研究は、これまでのノルウェー語アクセント研究における方法論的な不備を改善しようという点で意義があると考えられる。そもそも、ノルウェー語の複合語アクセントは、標準語に関しては Kristoffersen (1992, 2000) や Sakshaug (2000) に代表されるように比較的研究が進んでいるが、ノルド語（北方ゲルマン語）学の伝統を受け継ぐがために、考察の対象とする語例が一ないし二音節からなる固有語に偏るという問題点を残す。また近年

のノルウェー語アクセント研究は、自律分節音韻論など音韻理論の枠組みに従った理論研究に集中しており、一つの方言に関してそのアクセントの全体像を十分に捉えるまでには未だ至っていない。そのため、本記述研究は、標準方言のアクセント記述を改善する上でも重要な視点を投げかけると考えられる。

既に冒頭でも触れたように、本研究は純粋に「記述」言語学的な立場に基づいている。その意図するところは、生成音韻論や最適性理論などのいわゆる特定の音韻理論の枠組みに基づいて一般理論を構築するのではなく、飽くまでもフィールドワークにより得られた一次資料を通じて、その資料を過不足無く説明することのみに考察の範囲を限定するということである。音韻理論の枠組みによる理論的研究の重要性は否定するまでもないが、そのような理論的研究に値する言語は、英語や日本語を始めとする、「記述」の進んだごく一部の言語であると筆者は考える。従って、資料自体が乏しい Sandnes 方言は、ある特定の現象の資料に基づき早急に理論研究を進めるのではなく、むしろその全体像を描き出すべく詳細な記述研究を行うことが先決である。本研究の成果は、今後展開が期待される理論研究への有益な資料を提供することはいうまでもなく、この点でも本研究は意義があると言えよう。

### 1.3 先行研究

ノルウェー語の方言研究は長年に渡る伝統があり、そのため、当然のことながら Sandnes 方言に関しても調査報告ならびに研究報告があるに違いないが、既に述べたように、ノルウェー国外の研究者が参照可能な Sandnes 方言の資料は、管見に及ぶ範囲では皆無である。しかしながら、隣接する都市の方言である Stavanger 方言は、Sandnes 方言に音声面では極めて類似しており<sup>1)</sup>、また Stavanger 方言に関する先行研究は比較的容易に参照が可能である(例: Selmer 1927; Vanvik 1956 [1983: 214], 1979: 68) ため、Stavanger 方言に関する記述を頼りに Sandnes 方言の姿を伺い知ることは可能である。

### 1.4 資料、インフォーマント、調査方法

本研究の資料は全て、筆者が Sandnes 方言の話者一名<sup>2)</sup> をインフォーマントとして 2009 年から 2010 年にかけて実施した調査によって得られたものである。調査方法は、いわゆる「調査票読み上げ形式」、つまり印刷された調査項目を読み上げてもらった後、その項目に関する確認や質問の作業を行う、という行程を繰り返していく形式で行った。調査項目は、ノルウェー南東部の方言を基盤とする標準方言である Bokmål で記した。質問調査で使用した媒介言語は主として日本語だが、必要に応じてデンマーク語も併用した。

調査項目は、Bokmål に関する先行研究(例: Kristoffersen 1992, 2000) や系統的に近い言語であるデンマーク語に関する記述(Hansen 1956; 三村 2007a, 2008; Mimura 2009) などを参考に作成した。なお、本研究は、頭文字語(アルファベット略語)を構成要素とする複合語も調査の範囲としたが、頭文字語に関しては、後述するように、Sandnes 方言はもちろんのこと、Bokmål に関しても管見に及ぶ範囲では先行研究は全く存在せず、従って調査項目は、スウェーデン語(Collinder and Svenblad 1981)、デンマーク語(三村 2006, 2007b)、英語(田端 2005)、日本語諸方言(中井 2007; 清水 2006; 上野 2005) といった他の言語の頭文字語に関する記述や、辞書(Landro and Wangensteen 1986)、インターネットから収

集したものを参考に作成した。

### 1.5 表記

本稿では、議論の際に引用する資料は、まずイタリック体のラテンアルファベットでその綴りを、続いて音声字母を用いてその音声を提示する。しかしながら、Sandnes 方言は（他の方言と同様に）アルファベットによる正書法は確立していないため、本稿では便宜的に Bokmål の正書法で代用する。

本稿で用いる音声字母は基本的には国際音声字母（IPA）に準拠しているが、煩雑になるのを防ぐため、可能な限り簡略表記を用いている<sup>3)</sup>。但し、以下の二点に関しては IPA の正用法に従っていないため注意されたい。まず第一に、音調の表記は tone letter を用いず、H（高平調）、M（中平調）、L（低平調）、F（下降調）の記号を用いた。母音や子音といった単音を表記する音声字母に比べて tone letter はそれほど一般的でない点に加え、音声表記が煩雑になるのを防ぐ為である。また、音声表記から速やかに Acc1 と Acc2 の別を判読できるよう、音声表記の頭に上付きのアラビア数字の 1 と 2 を付した（例：[<sup>1</sup>], [<sup>2</sup>]）。第二に、強勢の表記には、IPA で一般的に用いられている [ˈa] や [ˌa]（母音は任意）の記号は用いず [á] や [à] の記号を用いた。こちらも、音調を示すアラビア数字との混同を回避し、判読のしやすさを重視した結果である。ちなみに音声表記中のピリオドは音節境界を示す。

なお、H、L、M、F の記号は、飽くまでも各音節の音調を（音韻論的な解釈を経た上で）大まかに三段階に分けて捉えた簡略的な表記に過ぎない点に注意されたい。従って、中国語の声調のように、それぞれの記号が固有の音調を示している訳ではなく、仮に同じ記号で表記された音調であっても、具体音声としては厳密には高さが異なる可能性も十分にある。またこの点に関連して、筆者が Sandnes 方言の音調を、三種類の「調素 toneme」の連続として解釈している訳でない点には十分に留意されたい<sup>4)</sup>。

### 1.6 Sandnes 方言の概要

Sandnes 方言の話される Sandnes はノルウェー南西部に位置する Rogaland 県（ノルウェー語：fylke）の一都市（kommune）である。2009 年の統計では約 6 万 5 千人の人口を有するノルウェーで 8 番目に大きな都市（by）である（典拠：<http://www.sandnes.no>; 稿末の地図も参照のこと）。

Bokmål と比較すると、Sandnes 方言は分節音のレベルでは様々な特徴を示すが、本稿の主題である韻律的な側面においてはそれほど大きな差異は示さず、唯一指摘すべき特徴として音調が挙げられる程度である。Sandnes 方言では（標準方言と同じく）語は主強勢を伴う音節を必ず一つ有し、その音節には高平調（Acc1）か下降調（Acc2）のいずれかの音調が現れる。

語例は非常に限られるが、音調の区別のみで対立する（疑似）最小対も確認されている。具体例を以下に示す（Acc1—Acc2 の順）：

- (1) a. *korte* [ˈkʰɔ̯g.tə HL] 「短い adj.sg.masc./fem.<sup>5)</sup>」 — *korte* [ˌkʰɔ̯g.tə FM] 「短い adj.pl.」

b. *avtale* [¹á:p.tʰà:la HML] 「約束する」—*avtale* [²á:p.tʰà:lə FML] 「約束」

Bokmål との関連で特筆すべきは、Acc2 の音調が標準語と同じく下降調であるのに対し、Acc1 の音調は、低く平らに現れる Bokmål のものとは反対に高く平らである。そのため、Acc1 を伴う多音節語の音調は、主強勢を担う音節から後続する弱音節にかけて全体としてなだらかな下降調を描く。また、Acc2 に関しては、Bokmål では下降調の現れる音節以降の音節が（末尾音節を除き）低平調を伴うのに対し、Sandnes 方言では下降調の直後の音節で一端中程度の高さに上昇し、やや高めから語末にかけてなだらかに下降する点も特徴的である。

なお、Acc1 の音調を本稿では H の記号で表記しているが、一貫して高平調が現れるのは、主強勢を担う音節に弱音節が後続する場合のみである。主強勢を担う音節が末尾音節である場合は（一音節語の場合も含めて）、イントネーションにより下降調や上昇調などの音調も現れ得るが、本稿では便宜的に高平調で代表させた。

## 2. 複合語アクセント規則

既に冒頭で触れた通り、Sandnes 方言では、全ての語には主強勢を伴う音節が必ず一つあり、その音節は常に Acc1 と Acc2 のいずれかの音調を伴う。強勢と音調の二つの韻律特徴は互いに緊密に関係しているものの、前者は語の「どの」音節が担うかという点で「位置」が重要だが、後者は当該音節に「どちら」の音調が現れるかという点で「種類」が重要であり、この意味で異質の現象といえる。そのため、以下、複合語のアクセントを考察する上では、強勢と音調を分けて議論を進めていくことにする。

### 2.1 強勢の型

複合語全体の強勢の型は以下に述べる単純な規則で導くことが出来る：複合語全体の主強勢は前部要素本来の主強勢が担い、複合語全体の副次強勢は後部要素本来の主強勢が担う。具体例を以下に示す（音調表記は割愛する）：

- (2) a. *appelsinmarmelade* [¹ap.pəl.sí:n.maʁ.mə.lâ:də] 「オレンジマーマレード」  
 (<*appelsin* [¹ap.pəl.sí:n] 「オレンジ」 + *marmelade* [²maʁ.mə.lâ:də] 「マーマレード」)  
 b. *hormonbalanse* [¹hɔʁ.mó:n.ba.lâŋ.sə] 「ホルモンバランス」  
 (<*hormon* [¹hɔʁ.mó:n] 「ホルモン」 + *balanse* [¹ba.lâŋ.sə] 「バランス」)

### 2.2 音調：Acc1 と Acc2 の選択

続いて音調の考察に移る。Sandnes 方言の複合語の音調を記述する場合、まず前部要素の音節数に着目する必要がある。議論を簡便にするため、まず 2.2.1 節で前部要素が多音節語の場合を考察し、続いて 2.2.2 節で前部要素が単音節語の場合を考察する。

### 2.2.1 前部要素が多音節語の場合

前部要素が多音節語の場合は、以下に示す単純な規則で複合語全体の音調は決定する：後部要素の長さや音調に拘らず、常に前部要素本来の音調が複合語全体の音調となる。具体例を以下に示す：

- (3) a. 前部要素が Acc1 の場合 (= 複合語全体の音調は Acc1)
- (i) *familienavn* [<sup>1</sup>fa.míl.jə.nàṽn MHML] 「苗字」  
 (<*familie* [<sup>1</sup>fa.míl.jə MHL] 「家族」 + *navn* [<sup>1</sup>náṽn H] 「名前」)
  - (ii) *familiedrama* [<sup>1</sup>fa.míl.jə.dʁá:ma MHMML] 「ホームドラマ」  
 (<*familie* [<sup>1</sup>fa.míl.jə MHL] 「家族」 + *drama* [<sup>1</sup>dʁá:ma HL] 「ドラマ」)
  - (iii) *familiepleie* [<sup>1</sup>fa.míl.jə.pläi.ə MHMML] 「(公共機関ではない一般家庭での) 児童保護」  
 (<*familie* [<sup>1</sup>fa.míl.jə MHL] 「家族」 + *pleie* [<sup>2</sup>pläi.ə FM] 「養護」)
- b. 前部要素が Acc2 の場合 (= 複合語全体の音調は Acc2)
- (i) *sjokoladeegg* [<sup>2</sup>ʃo.ko.lá:də.ègg MMFML] 「(チョコレート製の) イースターエッグ」  
 (<*sjokolade* [<sup>2</sup>ʃo.ko.lá:də MMFM] 「チョコレート」 + *egg* [<sup>1</sup>égg H] 「卵」)
  - (ii) *sjokoladefabrikk* [<sup>2</sup>ʃo.ko.lá:də.fa.bʁíkk MMFMHL] 「チョコレート工場」  
 (<*sjokolade* [<sup>2</sup>ʃo.ko.lá:də MMFM] 「チョコレート」 + *fabrikk* [<sup>1</sup>fa.bʁíkk MH] 「工場」)
  - (iii) *sjokoladekake* [<sup>2</sup>ʃo.ko.lá:də.kʰá:ga MMFMML] 「チョコレートケーキ」  
 (<*sjokolade* [<sup>2</sup>ʃo.ko.lá:də MMFM] 「チョコレート」 + *kake* [<sup>2</sup>kʰá:ga FM] 「ケーキ」)

### 2.2.2 前部要素が単音節語の場合

続いて前部要素が単音節語の場合について考察するが、この場合、後部要素の音節数に着目する必要がある。2.2.2.1 節では後部要素が多音節語の場合を、2.2.2.2 節では後部要素が単音節語の場合を考察する。

#### 2.2.2.1 後部要素が多音節語の場合

後部要素が多音節語の場合は、後部要素の音調がそのまま複合語全体の音調となる。具体例を以下に示す：

- (4) a. 後部要素が Acc1 の場合 (= 複合語全体の音調は Acc1)
- (i) *eggdonasjon* [<sup>1</sup>égg.do.na.ʃò:n HMML] 「卵子提供」  
 (<*egg* [<sup>1</sup>égg H] 「卵」 + *donasjon* [<sup>1</sup>do.na.ʃó:n MMH] 「寄付」)
  - (ii) *solssystem* [<sup>1</sup>sól.sys.tʰè:m HML] 「太陽系」  
 (<*sol* [<sup>1</sup>sól H] 「太陽」 + *system* [<sup>1</sup>sys.tʰé:m MH] 「体系」)



- (iii) *vannkanal* [<sup>1</sup>vánn.kɑ.nà:l̩ HML] 「水路」  
 (< *vann* [<sup>1</sup>vánn H] 「水」 + *kanal* [<sup>1</sup>ka.ná:l̩ MH] 「回路」)

b. 後部要素が<sup>s</sup> Acc2 の場合 (= 複合語全体の音調は Acc2)

- (i) *eggplante* [<sup>2</sup>égg.pɿ̀àn.tə FML] 「茄子 (植物名)」  
 (< *egg* [<sup>1</sup>égg H] 「卵」 + *plante* [<sup>2</sup>pɿ̀àn.tə FM] 「植物」)  
 (ii) *solvarme* [<sup>2</sup>só:l.vàɾ.mə FML] 「太陽熱」  
 (< *sol* [<sup>1</sup>só:l̩ H] 「太陽」 + *varme* [<sup>2</sup>vàɾ.mə FM] 「熱」)  
 (iii) *vannfarge* [<sup>1</sup>vánn.fàɾ.gə FML] 「水彩絵の具」  
 (< *vann* [<sup>1</sup>vánn H] 「水」 + *farge* [<sup>2</sup>fàɾ.gə FM] 「色」)

### 2.2.2.2 後部要素が一音節語の場合

後部要素が一音節語の場合は、複合語全体の音調は Acc2 となる。具体例を以下に示す：

- (5) a. *eggfrukt* [<sup>2</sup>égg.fɿ̀òkt FM] 「茄子 (の実)」  
 (< *egg* [<sup>1</sup>égg H] 「卵」 + *frukt* [<sup>1</sup>fɿ̀òkt H] 「果実」)  
 b. *solskinn* [<sup>2</sup>só:l̩.ʃinn FM] 「日光」  
 (< *sol* [<sup>1</sup>só:l̩ H] 「太陽」 + *skinn* [<sup>1</sup>ʃinn H] 「光線」)  
 c. *vannhjul* [<sup>2</sup>vánn.jù:l̩ FM] 「水車」  
 (< *vann* [<sup>1</sup>vánn H] 「水」 + *hjul* [<sup>1</sup>jù:l̩ H] 「車輪」)

### 2.2.3 結合要素を介する場合

前部要素が一音節語の場合がほとんどであるが、Sandnes 方言では (その他のノルド諸語と同様に)、結合要素を介して複合語を形成することがあり、この場合、複合語全体の音調は、後部要素の長さや音調に拘らず、結合要素の種類で決まる。

Sandnes 方言には、現時点で筆者が確認している範囲では、*-e-*、*-er-*、*-s-* の三種類の結合要素があり、複合語の音調はそれぞれ Acc2、Acc1、Acc1 となる<sup>6)</sup>。なお、(Sandnes 方言だけでなく、Bokmål を始め、デンマーク語など他のノルド諸語にも基本的に該当する事ではあるが) どの前部要素がどの結合要素と共起するかは語彙的に決まっており、規則による一般化は完全には不可能である：

- (6) a. (i) *folkemusikk* [<sup>2</sup>fɔ̃l̩.kə.mu.sikk FMHL] 「民謡、フォークミュージック」  
 (< *folk* [<sup>1</sup>fɔ̃lk H] 「国民」 + *-e-* + *musikk* [<sup>1</sup>mu.sikk MH] 「音楽」)  
 (ii) *folkeskole* [<sup>2</sup>fɔ̃l̩.kə.skò:lə FMHL] 「(小中一貫の) 公立学校」  
 (< *folk* + *-e-* + *skole* [<sup>2</sup>skò:lə FM] 「学校」)  
 b. (i) *blomsterbutikk* [<sup>1</sup>blóm.stɔɾ.bu.t<sup>h</sup>ikk HMML] 「花屋」  
 (< *blomst* [<sup>1</sup>blómst H] 「花」 + *-er-* + *butikk* [<sup>1</sup>bu.t<sup>h</sup>ikk MH] 「店」)  
 (ii) *blomstervase* [<sup>1</sup>blóm.stɔɾ.và:r.sə HMML] 「花瓶」

(*<blomst+er+vase* [<sup>2</sup>vá:sə FM] 「壺、瓶」)

- c. (i) *dagstur* [<sup>1</sup>dá:gs.t<sup>h</sup>ù:ɣ HL] 「日帰り旅行」  
 (*<dag* [<sup>1</sup>dá:g H] 「日」 + *-s-* + *tur* [<sup>1</sup>t<sup>h</sup>ù:ɣ H] 「旅行」)  
 cf. *dagbok* [<sup>2</sup>dá:g.bò:g FM] 「日記」  
 (*<dag+bok* [<sup>1</sup>bó:g H] 「本」)  
 (ii) *dagsreise* [<sup>1</sup>dá:gs.ɾǎj.sa HML] 「日帰り旅行」  
 (*<dag+-s-+reise* [<sup>2</sup>ɾǎj.sa FM] 「旅行」)

### 3. 複合語アクセント規則の例外

ここまで Sandnes 方言の複合語アクセントが規則により予測可能であることを主張して来た。確かにこれまで述べてきた規則でほとんどの複合語アクセントの事例が説明できる上、少なくとも強勢の型に関しては例外は存在しない。しかし音調に関しては、前部要素が一音節語で結合要素を介さない場合に限り、次の二種類の例外が確認されている：(1) 後部要素の長さや音調に拘らず、常に複合語全体の音調は Acc1 となる、(2) 後部要素が Acc1 の多音節語でありながら複合語全体の音調は Acc2 となる。

基本的には、これらの例外的な語例も、各構成要素の文法的、意味的、韻律的特性に着目して下位規則を立てることにより、説明が可能である。

#### 3.1 後部要素に拘らず複合語全体が常に Acc1 となる場合

##### 3.1.1 前部要素が機能語である複合動詞

Sandnes 方言では、単一の形態素から成る動詞には一音節のものと二音節のものがある。前部要素が一音節語である場合、複合語アクセント規則に従えば、複合動詞全体の音調は後部要素である動詞の長さに拘らず (7a.) に示すように Acc2 が期待されるはずであるが、第一要素が機能語である場合は、(7b.) に示すように全体の音調は例外的に Acc1 となる：

- (7) a. (i) *veilede* [<sup>2</sup>váj.lè:.da FML] 「指導する」  
 (*<vei* [<sup>1</sup>váj H] 「道」 + *lede* [<sup>2</sup>lé:.da FM] 「導く」)  
 (ii) *rengjøre* [<sup>2</sup>ɾǎj.jòɾɛ FM] 「掃除する」  
 (*<ren* [<sup>1</sup>ɾǎj H] 「きれいな」 + *gjøre* [<sup>1</sup>jóɾɛ H] 「～をする」)
- b. (i) *nedskrive* [<sup>1</sup>né:ɣ.skɾí:.va HML] 「書き留める」  
 (*<ned* [<sup>1</sup>né:ɣ H] 「下へ adv.」 + *skrive* [<sup>2</sup>skɾí:.va FM] 「書く」)  
 (ii) *inngå* [<sup>1</sup>inn.gò: HL] 「(契約などを) 結ぶ」  
 (*<inn* [<sup>1</sup>inn H] 「中に adv.」 + *gå* [<sup>1</sup>gó: H] 「行く」)

これまでの筆者の調査の範囲では、この事例に関しては例外は確認されていない。



### 3.1.2 前部要素が動詞不定形の場合

複合語アクセント規則に従えば、前部要素が一音節語の場合、後部要素が多音節語であれば後部要素の音調が複合語全体の音調に、また後部要素が単音節語であれば Acc2 が複合語全体の音調となる。しかしながら、以下に示す複合語は、後部要素の音節数と音調を問わず全体の音調が Acc1 であり、この点で例外的である：

- (8) a. *gågate* [<sup>1</sup>gò:.gà:.da HML] 「歩行者天国」  
 (<*gå* [<sup>1</sup>gò: H] 「行く」 + *gate* [<sup>2</sup>gá:.da FM] 「通り」)  
 b. *ståplass* [<sup>1</sup>stó:.pláss HL] 「立ち見席」  
 (<*stå* [<sup>1</sup>stó: H] 「立っている」 + *plass* [<sup>1</sup>pláss H] 「場所」)

(8) の語例に共通する特徴は前部要素が動詞不定形（英文法でいう原形に相当）である点で、ここからこれらの語例の例外的な振る舞いを一般化することが可能である。筆者の資料では、この事例に関して例外は確認されていない。

### 3.1.3 前部要素が -VCC(C) の音節構造を有する場合

前部要素が -VCC(C)、つまり音節核音 (nucleus) が短母音で音節末音 (coda) 子音連結という音節構造を有する場合は、後部要素の音節数と音調を問わず、複合語全体の音調は常に Acc1 となる。具体例を以下に示す：

- (9) a. (i) *kampskip* [<sup>1</sup>k<sup>h</sup>ám̥p̥.ji:p HL] 「戦艦」  
 (<*kamp* [<sup>1</sup>k<sup>h</sup>ám̥p̥ H] 「戦闘」 + *skip* [<sup>1</sup>ʃi:p H] 「船」)  
 (ii) *kampfelle* [<sup>1</sup>k<sup>h</sup>ám̥p̥.fél.lə HML] 「戦友」  
 (<*kamp* + *felle* [<sup>2</sup>fél.lə FM] 「仲間」)  
 b. (i) *fangstbåt* [<sup>1</sup>fán̥st.bò:d HL] 「漁船」  
 (<*fangst* [<sup>1</sup>fán̥st H] 「漁」 + *båt* [<sup>1</sup>bò:d H] 「ボート」)  
 (ii) *fangstflåte* [<sup>1</sup>fán̥st.flò:.da HML] 「漁船の船団」  
 (<*fangst* + *flåte* [<sup>2</sup>flò:.da FM] 「船団」)

筆者の資料では、-VCC(C) という音節構造を有する一音節語のほとんど<sup>7)</sup> が例外的に振る舞うが、(10) に示す *øst* 「東」のように規則的な振る舞いを示すものも幾らか確認されている：

- (10) *østkyst* [<sup>1</sup>óst̥.jýst FM] 「東海岸」  
 (<*øst* [<sup>1</sup>óst̥ H] 「東」 + *kyst* [<sup>1</sup>ýst̥ H] 「海岸」)。

このような音節構造を有する語には、*dansk* [<sup>1</sup>dán̥sk H] 「デンマーク (語/人) の/語」

や *fransk* [<sup>1</sup>fɿʁɑ́nsk H] 「フランス (語/人) の/語」のように国籍や言語名を表すものが含まれたり、*tank* [<sup>1</sup>tʰɑ́ŋk H] 「タンク」のような外来語も多く含まれるが、果たして意味特性や語種の面から一般化が可能か否かは現時点では不明である。今後の調査の課題としたい。

### 3.1.4 前部要素が頭文字語の場合

前部要素がアルファベット一文字からなる略語 (ないしそれと類似する機能を有するもの) である場合、複合語全体の音調は、後部要素の音調や音節数に拘らず、常に Acc1 となる。具体例を以下に示す:

(11) a. 後部要素が Acc1 の場合

(i) *B-film* [<sup>1</sup>bé:film HL] 「B 級映画」

( < *B* [<sup>1</sup>bé: H] + *film* [<sup>1</sup>film H] 「映画」)

(iii) *C-vitamin* [<sup>1</sup>sé:vi.ta.nĩ:n HMLL] 「ビタミン C」

( < *C* [<sup>1</sup>sé: H] + *vitamin* [<sup>1</sup>vi.ta.mĩ:n MMH] 「ビタミン」)

b. 後部要素が Acc2 の場合

(i) *A-menneske* [<sup>1</sup>á:mèn.nə.skə HMLL] 「規則正しい生活を送る人」

( < *A* [<sup>1</sup>á: H] + *menneske* [<sup>2</sup>mén.nə.skə FML] 「人間」)

(ii) *y-akse* [<sup>1</sup>y:ák.sə HML] 「Y 軸」

( < *y* [<sup>1</sup>y: H] + *akse* [<sup>2</sup>ák.sə FM] 「軸」)

既に 2.2.2.1 節と 2.2.2.2 節で論じたように、前部要素が一音節語である場合は、後部要素が多音節語であれば後部要素本来の音調が複合語全体の音調に、また後部要素が一音節語であれば複合語全体の音調は Acc2 になるが、(11a.i) の *B-film* や (11b.i) の *A-menneske*、(11b.ii) の *y-akse* はこの点で例外的と言える。これらの例外的な事例と (11a.ii) の *C-vitamin* のような規則的な事例の統一的な説明は、音節数ではなく「文字数」に着目し、前部要素が全て一文字語であることを指摘することで初めて可能となる。

### 3.2 後部要素が Acc1 の多音節語でありながら複合語全体が Acc2 になる場合

以下に示す複合語は、前部要素が一音節語で後部要素が Acc1 の多音節語であるため、複合語アクセント規則に従えば全体の音調は Acc1 になることが期待されるが、実際は Acc2 となっており例外的である:

(12) a. (i) *blodmangel* [<sup>2</sup>bló:màŋ.ŋə] FML] 「血液不足」

( < *blod* [<sup>1</sup>bló: H] 「血」 + *mangel* [<sup>1</sup>máŋ.ŋə HL] 「欠乏」)

(ii) *bokhandel* [<sup>2</sup>bó:g.hàn.də] FML] 「書店」

( < *bok* [<sup>1</sup>bó:g H] 「本」 + *handel* [<sup>1</sup>hàn.də HL] 「貿易、商店」)

b. (i) *gulbrun* [<sup>2</sup>gú:l.bɿ̀:̃.nə FML] 「黄味がかった茶色 adj.]

- ( <gul [ˈɡú:l̩ H] 「黄色」 + brun [ˈbrʉ́:nə HL] 「茶色い adj.」 )  
 (ii) gullgul [ˈgúll.brʉ́:nə FML] 「琥珀色がかった黄色 adj.」  
 ( <gull [ˈgúll H] 「黄金」 + gul [ˈɡú:l̩ HL] 「黄色い adj.」 )

上記の複合語は、純粋に共時的な立場を採ると、全て例外的な事例として語彙レベルで音調を指定する必要があるが、通時的にはなぜ Acc2 を担うかが説明可能である。というのも後部要素である *-handel*、*-mangel*、*-brun*、*-gul* は、Sandnes 方言内部での対応関係や Bokmål や他のノルド諸語のアクセントとの比較対応から、元来は一音節語であり母音挿入や母音添加を経て二音節語になったことが推定されるからである<sup>8)</sup>。つまり、後部要素である *-handel*、*-mangel*、*-brun*、*-gul* が (通時的な推定に基づき) アクセント上は一音節語として振る舞っていると仮定すれば、(5) に示した *eggfrukt* など「一音節語 + 一音節語」の語例と同様に扱う事が可能となり、複合語アクセント規則に合致することが明らかとなる。

#### 4. 結語

##### 4.1 まとめ

以上、ノルウェー語 Sandnes 方言における複合語アクセントについて考察し、複合語の強勢の型と Acc1 と Acc2 の間の選択が基本的には規則により予測可能であることを主張した。本研究で導かれたアクセント規則を要約すると (12) に示すようにまとめられる：

(13) a. 強勢の型：

複合語全体の主強勢は前部要素本来の主強勢が担い、副次強勢は後部要素本来の主強勢が担う。

b. 音調：

- (i) 前部要素が多音節語の場合は前部要素の音調が複合語の音調となる。  
 (ii) 前部要素が一音節語の場合は、後部要素が多音節語であればその音調が複合語全体の音調となり、後部要素が一音節語であれば全体の音調は Acc2 になる。ただし、結合要素が介する場合は各要素の音節数は関与せず、結合要素が *-er* あるいは *-s* であれば全体の音調は Acc1 に、*-e* であれば Acc2 となる。

c. 音調に関する例外：

前部要素が一音節語の場合に限り、音調に関する規則には例外が存在するが、ほぼ全ての事例に関して、前部要素の意味的、文法的、韻律的特性から説明が可能である：

- (i) 前部要素が機能語である複合動詞は常に Acc1 となる。  
 (ii) 前部要素が動詞不定形の場合は、後部要素の音調や音節数を問わず常に Acc1 となる。  
 (iii) 前部要素が *-VCC(C)* の音節構造を有する場合は、後部要素の音調や音節数を問わず常に Acc1 となる。但し、わずかに例外あり。

- (iv) 前部要素が頭文字語の場合は、後部要素の音調や音節数を問わず常に Acc1 となる。
- (v) 後部要素が Acc1 の多音節語でありながら、複合語全体の音調が Acc2 になる場合があるが、この場合は後部要素が通時的に単音節語であると推定することによって説明が可能となる。

## 4.2 今後の課題

ほとんどの事例が規則ないし下位規則で説明が可能であったが、例えば -VCC(C) の音節構造を有する単音節語を前部要素とする複合語のように、未だに完全には説明の出来ない例外も残る。更なる調査を進めて、それらが果たして真の意味での例外であるのか、あるいは意味特性や語源などの情報に基づき何らかの下位規則を設定することが出来るのか、調査を進めていきたい。また、二要素以上の構成要素からなる複合語の調査を通じて本研究で導いた複合語アクセント規則の検証を進めるとともに、dvandva (並列的な意味関係を持つ複合語；例：「マルクスレーニン主義」) のような「修飾部＋主要部」の構造を持たない複合語にも考察の範囲を広げて、Sandnes 方言の複合語アクセントの全体像の解明を進めていきたいと思う。

### 註

- 1) これは、発表者の採取した Sandnes 方言の資料と先行研究との比較対照を通じての、またインフォーマントの報告に基づいての判断である。
- 2) インフォーマントは Brede Tingvik Haave さん (1988 年生、男性)。大学進学のため首都 Oslo に移り住むまで Sandnes に居住。ご両親もおそらく Sandnes の出身であるとのこと。本研究の調査に尽力して下さった Tingvik Haave さんにこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。
- 3) 例えば、Sandnes 方言では、強勢を伴う短母音が無声阻害音からなる子音連結に先行する場合、母音の直後にわずかな無声化が生じるいわゆる「前気音」(に類似した現象?) が確認されているが (例：kaffe [kʰdʰfi HL] 「コーヒー」)、本稿での音声表記では全て割愛した。
- 4) 紙幅の都合により詳細な議論は稿を改めざるを得ないが、現時点で筆者は、Bokmål ならびに Oslo 方言に関して行った解釈 (三村 2005) と同じく、Sandnes 方言における Acc1 と Acc2 の差異も、強勢に対する音調の相対的な位置の違いとして解釈することが出来るのではないかと推測している。
- 5) 本稿で用いる略号は以下の通り：adj. 「形容詞」、adv. 「副詞」、fem. 「女性」、masc. 「男性」、pl. 「複数形」、sg. 「単数形」。
- 6) 拙論 (三村 2010b: 184) では、結合要素 -e-, -er-, -s- がそれぞれ Acc1、Acc1、Acc2 を導くと述べているが、これは筆者の誤りである。正しくは本論文に記載した通りである。この場をお借りして訂正する。
- 7) 資料の項目数が未だ少なく、そのため厳密な統計的数値を出すには至っていないが、これまで行った調査の印象から判断すると、-VCC(C) という音節構造を有する単音節語のおよそ八割がアクセント上、例外的な振る舞いをしていないのではないかと予想される。
- 8) 例えば、Sandnes 方言の *handel* と *mangel* に対応するデンマーク語標準方言の *handel* [hén'əl] と *mangel* [mán'əl] は、通時的には単音節語にのみ現れかつ Acc1 に通時的に対応することが証明されている stod (声門狭窄の一種；[ ] で表記。詳細は拙論 (Mimura 2009) を参照) が現れており、この点から Sandnes 方言とデンマーク語のいずれにおいてもこれらの語が本来単音節語であったことがうかがえる。また、Sandnes 方言の *brun* [brú:nə HL] と *gul* [gú:lə HL] は、Bokmål では単音節語で Acc1 を伴い、またデンマーク語でも単音節語で stod を伴う (例：brun [brú:n], gul [gú:l]) ため、かつては単音節語であったことが推定される。

### 参考文献

- nationella förkortningar med förklaringar*. Stockholm: Liber Förlag.
- Hansen, Aage (1956). *Udtalen i moderne dansk*. København: Gyldendal.
- Kristoffersen, Gjert (1992). "Tonelag i sammensatte ord i østnorsk." *Norsk Lingvistisk Tidsskrift* 10, pp. 39-65.
- Kristoffersen, Gjert (2000). *The Phonology of Norwegian*. Oxford: Oxford University Press.
- Landrø, Marit Ingebjørg and Boye Wangensteen. 1986. *Bokmålsordboka: Definisjons- og rettskrivningsordbok*. Oslo: Universitetsforlaget.
- 三村竜之 (2005). 「ノルウェー語ピッチアクセント再考」. 『日本言語学会第130回大会予稿集』, pp. 18-73.
- 三村竜之 (2006). 「デンマーク語頭文字語の音韻論」. 『第20回日本音声学会全国大会予稿集』, pp. 219-202.
- 三村竜之 (2007a). 「デンマーク語の複合語アクセント：アクセント決定の諸制約とアクセント単位」. 第二回熱海 Phonology Festa (2nd. Joint Meeting of PAIK and TCP). 2007年2月5日、ホテルKKR熱海.
- 三村竜之 (2007b). 「デンマーク語アルファベット関連語彙の音韻論」. 『東京大学言語学論集』 26, pp. 1-20.
- 三村竜之 (2008). 「アルファベット複合語から見たデンマーク語複合語アクセントと意味制約」. 『日本言語学会第136回大会予行集』, pp. 294-299.
- 三村竜之 (2010a). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言のアルファベット頭文字語の音韻論」. 日本音韻論学会2010年度春期研究発表会 (2010年6月18日、産学公連携センター・秋葉原サテライトキャンパス).
- 三村竜之 (2010b). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言の複合語アクセント規則」. 『日本言語学会第140回大会予稿集』, pp. 182-187.
- 三村竜之 (近刊). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言におけるアルファベット頭文字語の音韻論」. 『音韻研究』 第14号.
- Mimura, Tatsuyuki (2009). *Issues in Danish Word-prosody: A Synchronic Description*. 未刊行博士学位申請論文. 東京大学
- 中井幸比古 (2007). 「中央式アクセントにおけるアルファベット頭文字語のアクセント」. 『音声研究』 11, pp. 69-86.
- Selmer, Ernst W. (1927). *Den musikalske aksent i Stavanger-målet*. Oslo: Det norske videnskaps-akademi i Oslo.
- Sakshaug, Laila (2000). "Tonelagstilordning i norske samansetjingar." *Maal og Minne*. (Hefte) 2, pp. 195-212.
- 清水泰行 (2006). 「近畿方言におけるアルファベット頭文字語のアクセントと式保存」. 『音声研究』 10, pp. 83-95.
- 田端敏幸 (2005). 「英語における頭文字語の音韻論的側面」. 日本音韻論学会編. 『音韻研究』 第8号, pp. 97-104. 東京：開拓社.
- 上野善道 (2005). 「日本語方言のアルファベット関連語彙のアクセント」. 『東京大学言語学論集』 24, pp. 171-196.

Vanvik, Arne (1956). "Norske tonelag." *Maal og Minne* 1956, pp.92-12. [Eds., Ernst Håkon Jahr and Ove Lorenz. 1983. *Prosodi/Prosody* (Studier i norsk språkvitenskap 2). Oslo: Novus forlag, pp. 209-219. に再録]

Vanvik, Arne (1979). *Norsk fonetikk: Lydlæren i standard østnorsk supplert med materiale fra dialektene*. Oslo: Fonetisk institutt, Universitetet i Oslo.

\* 本稿は拙論（三村 2010a, b, 近刊）に加筆ならびに修正を加えたものである。口頭発表において有益なコメントを下された聴衆の方々、論文の草稿に貴重な助言を下された方々に、この場をお借りして深くお礼を申し上げる。



図1 ノルウェー全体から見た Rogaland Fylke の位置  
(<http://en.wikipedia.org/wiki/Sandnes> より転載)



図2 Rogaland Fylke における Sandnes Kommune の位置  
(<http://da.wikipedia.org/wiki/Sandnes> より転載)



